

研究結果報告書

梶山季之の植民地朝鮮関連作品の諸相

－植民二世の体験と記録－

所属 : 全北大学校 人文大学
役職 : 講師
氏名 : 崔 俊鎬

本研究は戦後に活躍した植民二世作家である梶山季之の植民地朝鮮関連作品、とりわけ「族譜」と「李朝残影」注目し、各作品に現れる植民地朝鮮・朝鮮人表象及び植民二世としての作家の自他認識に焦点を当てて分析を試みた。まず「族譜」は、植民地朝鮮における皇民化の一環として推進された創氏改名政策を通して、家系を断絶される危機に直面した薛鎮英一家の苦悩と葛藤を、日本人青年の視線で描いた作品である。内鮮一体という美名のもとに行われた帝国日本の偽善的で暴力的な植民地政策の推進過程を通して、植民地に生きる被支配者の悲劇的な運命の一端を描いた作品である。しかし、この作品は帝国日本の悪辣な植民地支配とこれによって苦しめられる朝鮮人という典型的な善悪構図からはみ出ている。主人公の日本人青年谷は、徴用を避けるために創氏改名を担当する部署で働いており、創氏改名を拒否する薛鎮英もまた帝国日本に協力する大地主の親日家として造型されている。したがって、この作品における二人の中心人物は帝国日本と植民地朝鮮の支配と抵抗の枠組みから外れ、時代に順応して生きる植民地朝鮮の多様な群像の一部として描かれている。一方、韓国において映画化された『族譜』は大筋においては原作を充実に再現している。ただし 植民地統治の状況下において家族の生活と族譜の継続という難問に苦悩する薛鎮英（映画でが薛鎮英）に重きが置かれている特徴を持つ。

もう一つの作品である「李朝残影」は宗主国の男性と植民地の女性が織り成す悲恋の物語を植民地朝鮮という時代背景の中で描き出した一種の恋愛小説として読まれる。しかし、この作品には男女のロマンスを中心軸として、朝鮮の風習と風物、植民二世特有の植民地朝鮮及び帝国日本に対する認識、そして歴史的事実に基づいた植民地の時代状況に対する描写がその周辺部を形成している。これは、作品が単に男女間の恋愛物語ではなく、作家の植民二世としての体験を基に、植民地朝鮮の実態を再構成し読者に伝えようとしたものだとして評価できる。しかし、映画版「李朝残影」にはこのような原作に潜められた作家の実体験と戦後植民地朝鮮に対する関心によって蓄積された情報、そしてこのような植民地朝鮮の多様な層位を読者たちに伝えようとした意図を十分に反映しているとは言い難い。むしろ映画の中で重点的に描かれるのは男女の悲恋と悪辣な日本人の姿、そして朝鮮の独立に燃える朝鮮人の姿である。

以上、梶山季之の二つの朝鮮関連代表作について分析してみた。これらの作品には他の植民地朝鮮を舞台にした作品にみられる紋切り型の被支配者と支配者の善悪構図から一步離れたところから、自らの実体験を反映させながら植民地朝鮮の多様な層位を描き出そうとする作家の意図が読み取れる。近年の硬直した日韓関係を和らげるために必要なものとは、このような植民地時代を経験した当事者たちが残した記録を掘り出し、そこに埋もれている個別の意識を明らかにし、また繋げていくことで抜け目のない歴史の実像を再構築する作業に他ならない。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)
準備中

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

口頭発表後、執筆予定

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)